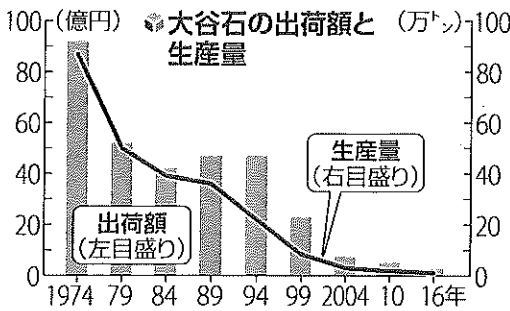


大谷石再生

大谷石 内外装材に活路

大谷石はかつて、石塀や蔵の建材として人気が高かったが、安価なコンクリートに取って代わられ、石材業の規模は全盛時の10分の1ほどに縮小した。しかし近年、内外装材として活路を見いだしつつある。

大谷地区で最大規模の採石場を持つ石材会社「大谷石産



業」では、30〜70歳代の従業員3人が約2000㎡・坪の原石を1日約50本、手作業で掘り出している。

同社営業部長の飯村淳さん(55)によると、最近住宅展示場への納入が急増しているといい、「大谷石の温かみのある落ち着いた風合いが見直されている。門柱やインテリアとしての暖炉に使いたいとの注文も増えていると話す。

同社は、保温性や耐火性、音響効果や熟成効果など、大谷石の特長をPRして、販路拡大を強化しており、先月完成した武蔵野音楽大学(東京都)のコンサートホールにも使用された。

ホールの建設に関わった永田音響設計(東京都)の担当者「音を拡散させるための凹凸がつけやすい。高音から低音まで、色々な楽器の音色

新国立競技場にも

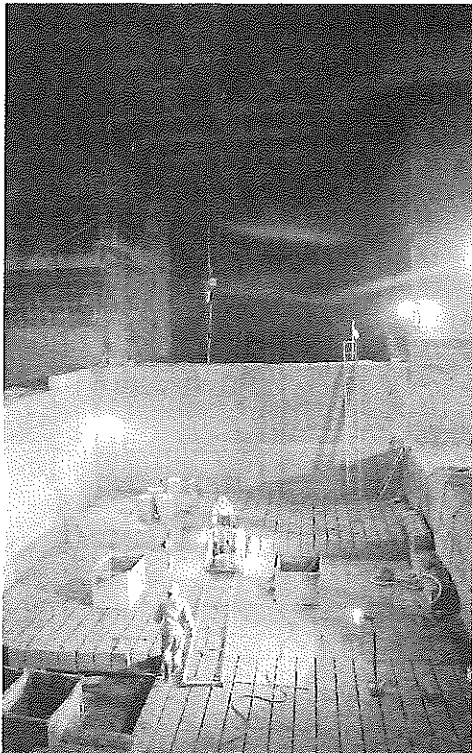
に対応することが可能だ」と説明する。

大谷石材協同組合によると、最盛期だった1974年は、採掘業者数は103社で、作業員数は1744人だった。しかし、昨年は9社で129人。生産量も87万㎡から1・1万㎡に、出荷額は92億円から2・9億円に減少した。同組合は、作業員離れを防ぐため、今年4月から標準

価格を約1・4倍に引き上げた。

一方、大谷石内外装材協同組合によると、近年は内外装材に使われる板材が好調で、昨年は前年比150%超の出荷量だった。今年も昨年並みで推移しているという。

飲食店など商業施設の内装材としての利用も増えてきており、最近では、コーヒーチェーンの「プロント」浅草店



大谷石産業の地下500mの採石場(宇都宮市大谷町で)

や、「ベックス」東京新幹線店などで使用された。外食大手の大戸屋ホールディングスはニューヨーク店など国内外数店舗の床やカウンターに使用しており、担当者は「和の空間とよくなじみ、現地の外国人にも好評」と話している。

行政も地元産業の保護に努めている。宇都宮市は大谷石を使って住宅や事務所を建設する場合、工事費の3割を補助しており、昨年度は52件の利用があった。県も2011年度から100万円を上限に補助しており、今年度から対象を広げ、県内事業者が県外で新築や増改築する際にも補助する。

20年東京五輪・パラリンピックの会場となる新国立競技場にも使用される見込みで、大谷石産業の飯村さんは「県や市のおかげもあり、使用される機会が広がってきている。さらに需要を掘り起こし、伝統産業を守りたい」と話している。

(この連載は鯨井政紀が担当しました)